

採取の時期・場所 サルケを採取した時期は春だという。

採取の主体 P氏は子どもの頃に、採取の手伝いをした。四角く切ったサルケを高い場所に上げたり、運搬したりする作業を手伝った。「豆腐、まあ、ベース状にやったものを自分だちがけっきょぐ、1メートル以上のとごがらタガダイにこうあげで、それをけっきょぐあの、乾燥させるに、手伝ったな。」「自分では当時の頃はそんなに力ねえがら、(刈り取った稲を) こういうふうに束を5つぐらいこう、起こして立て、しょったり、あどは背中、1メートルぐらいのモッコ使ったり。(稲の場合は) しょうモッコ。(サルケの場合は) 束ねて……持ってきた記憶あるな。」

採取の目的 サルケは土地改良の過程で採取され、燃料として利用したという。田を作ると同時に燃料を採ることができるのは、「昔の人の知恵」だと考えている。「掘るって……小さい頃な。家庭の燃料だんだ。」「まあ、それ(サルケ)は暖房って、ムガシの人の知恵つつのがなあ。今みたいな灯油もないしガスもないがら、ケッキョグ自給自足って感じで、自分で田んぼを作るために、けっきょぐ、それを利用したんです。耕すに。ヤヂを、野原っていえばいんだが、すごさって自分の土地だよって、政府がら買ったのがさ個人がら買ったのがさ国がらもらったのがわがらんねえけども、耕した分は自分のものっちゅわれでたんでないのがなあ。してそういう木、笹、切ったぎってしまつて、上の皮ぐらい全部客土して全部取り外して、そういう層にあだれば、こんだ切りミ(目)入れて、耕して、採つて、山のほうがら逆にスナツヂもってきていれで、して田んぼにして。」

採取の方法 タヂでサルケの層の表面に切り込みを入れ、モッタやサンボンカで持ち上げて採取した。カグスコップ(角スコップ)に似た形の縁のない道具や、柄と刃が並行に付いた道具など、掘り出す際にはさまざまな道具が使われたという。掘り出す大きさは、新聞紙半分大(約40×30cm)、厚さ15~6cmほどであったという。大人が採掘したものを、P氏ら子どもが1m以上ある高台に運び上げた。「柄と平行に刃が付いてるのもあるし、モッタ、あどこんだサンボンカ、けっきょぐ、キズを入れでがら、グツってこうやつてこう、持ち上げだり。」「それ(サルケ)をけっきょぐあの、何ていうが、カグ(角)スコップ、タヂつてんだが、わがる?あれ持つてこう、切りを入れて、まあ、豆腐状に。豆腐状つてのが、あの、ベース型に。野球のベースあるでしょ。あのベース型に。(大きさは、新聞紙を半分に畳んだほどであると示しながら)厚さ……うん20cm……ねえなあ、15~6cmぐらいに。ケッキョグこういうぐらいな。こういうぐらいな形に。それを結局シカグにも、タデヨゴさ入れでもそういうもう、根がいっぱいという、まあ、ヨシだどがいろいろなもの、いっぱい根が回つたのがサルケだよ。みっしぶど。」「それをケッキョグ、親だちが、カグスコップつていうが、何て言うのがな、カグスコップじゃフヂ付いでるがらアレだけど、名前分がんねんだいな。それこそスコップではなく、クワじゃなく、それをギャグにこうして、こういう、名前ちょっとわがんねえな。ペダツつとしたやづ。それこそ馴れだべなあ。タヂ持つてこう、バンババンバこう、キズ付けでいって、感覚だがなあ。自分の持つかんかぐ。グリップの感覚でこう、シッシッシツつどやつてそれこそモッタの長さこれぐれがなあ。ぐつとシャツシャツシャツど、まんながでシュツとこう、豆腐、まあ、ベース状にやったものを自分だちがけっきょぐ、1メートル以上のとごがらタガダイにこうあげで、それをけっきょぐあの、乾燥させるに、手伝ったな。」

乾燥・運搬・保管 掘り上げたサルケは、お互いがもたれ掛かるように立たせて乾燥させる方法と、互い違いにハイヅミにする方法があり、前者がより一般的であったという。立てかける形で3割程度水分が抜けたところで、あらためてそれをハイヅミにした。乾燥させるといっても、完全に水分を抜くということを意味するものではなかった。積み方は、稲や薪の乾燥のさせ方と共通しているという。また、それらの積み方の経験は、P氏が稲作をやめたのちに魚のナマツケをおこなった際に、サガナバコをハイヅミにすることによって荷崩れを防ぐという考えにも応用したとP氏は語る。「ただあの、こう、サルケであればこういう具合にこう、合わせで、そうでなかつたらこういう、ハイヅミにしていぐのかな(互い違いに)。どっちがってば、こう合わせだ。こうペッタラつても倒れるわけでもないがらさ。こういう風にして、水分を抜いていって、それがけっきょぐ乾燥してくればまだ、それなりにこう、ハイヅミにこう、積んでいったりとがして。マシカグではえねがら。どっちがってば細長のアレだがら、それをハイヅミにこう、互い違いに。(両側をVの字に寄せかける立て方もあれば、)今こごあたりでは田んぼなくなつたがら……津軽のほうさ行けば、刈り取りど一緒にダツコグするけども、こういう具合にこう、根っこ、あれあの、刈ったイネこう、干してつけの。こういうお互いに力を借りて転ばないようにこう、こつち穂にして、逆さ立ちにさせでこちネツコのほう、へばけっきょぐ、この芯が乾いで乾燥すのどおんなじ状態でうん、乾燥豆腐……ま、単純に言えば灰色になった……灰色の色だな。その水分が吸い込まれでさ。で、割れるわけでもない。けっきょぐ、乾燥して初めて割れるんだがらさ。して層がでぎでさ。」「うーん、やっぱりこう、おだがい風どおし良ぐ……ま、そういうアレもあつたのがなあ。それで、なんぼが生乾ぎになつてくれば、ハイヅミにして、東西南北から風入るような状態で……」「そうやつてお互いに力を加えて、水分を抜いて、乾いだ状態……てば1枚3キロが4キロぐらい水分、厚さにしたら15cmぐらいの厚さだなあ。で7分ぐらい、まあ30%ぐらい水分が減つて乾ぐがら、うん、そういう感じで、乾げば、それなりにハイヅミした状態でけっきょぐ風通しよく、100パーセントしっかり燃えるだけ、乾燥すわけがねがらさ、

それはけつきよぐ、長年積んでいで、で、燃料として。」

秋になると、乾燥したものをモッコで背負って運搬した。余分にサルケのニオをつくっておき、足りない分は冬に人力のソリで運んだ。運搬に馬やバヂは使わなかった。「馬を使ったことはない。それこそ、モッコで。持ってきた記憶あるな。で、ある程度乾いてきたら、うちのほうの庭つつうが持ってきて積んどいて。」「それこそアギまでそういう状態で、アギなれば冬焚ぐためにナガへ持ってきてくれればむごさ余分につぐとげば、野積みしといで、時期が冬なればさ、人力のな。ワ、名前忘れだじゃ。ソリがあんだよ。こういうソリなんだけども（右写真）、鉄板、貴重だんだがなあ、ムガシなあ。鉄板敷いだやづで、こういうソリ使って、こごさこう、なんだが付いで



サルケの運搬に使用されたソリ (P氏画)

んだよ。木えぐったやづ。これを2本やった、ナニソリたがなあ。これを繋いで、繋ぐづぎ、手にこういう、荷台にこう、こうなつてさ。これ人力でひぐわけさ。リヤカーみたいにさ。（取っ手は）ちゃんところ、反つてんだよ。こういうもう、山がらこういう木を採つて来るんだよな。加工すわけでねんだよ。こういうタヂキのこう枝あれば、ああこごがら切たぎればこういう反りがだになるのがてこう、ムガシの知恵だべなあ。だがらちよところ、タガチガイって感じで。それにコゴさケキョグ、縛って、こさ人間がこういう感じで、かだかわさタシギ（タスキ）かげだ状態でこう引っ張るわけさ。」

使用法・用途 炉のほかには手作りのカマドがあった。炉では主に木炭を、カマドではサルケを焚いたと記憶している。焚き付けには杉の葉を乾燥させたものを用いた。その後は、炉に薪ストーブを置き、近所の製材所から購入した廃材を燃やした。「カマド、むがしでそれこそドロソコど、こごもアガツチで、アガカベどがつてあるがらさ、そのうので石でカマドつくつたり。カマド……そんなに丈夫なカマドっていうわけではねえけどさ、であどはなんぼが近代化されてストーブな。だるまストーブのようなものもあるし、普通のこう、ストーブあるし。カマドで……自分はそんなにきおぐはねえんだけども、カマドはありましたよ。火つけるどぎはまず杉の葉。あれはまずすぐ燃えるしさ。長持ちして点火力があるがら、杉の葉っぱを乾燥させだやづをケッキョグたき付けに最初、火だねに使うて、してもう、つげば、（サルケは）単純に言えば固形燃料だな。ロブヂもあったよ。ロブヂはどっちがてば木炭。うちのほうはな。づがには、そういう煙出るものは、ロブヂでは焚がない。ああ、暖房とるにな。暖房とるにうん、ロブヂあった。うん、ロブヂあって、そういうストーブおいで、ケッキョグリンゴバゴみたいハゴど、まあ、てづぐりのハゴだべなあ。今だコンテナだハゴだのであるけどさ、そういうのさけつきよぐナダもつて割つてきて、簡単にいえば、パンスライスしたようなパン、あまりおつきぐもねちやつこぐもねえ、ような、トストぐらいのパンぐらいだなあ。あれまだ簡単にこう、目があつてさ、サゲルし割れるし、おつきぐベースボールぐらいベースぐらいのあれでまずもつてきて、どうしてもあれだばこう、なんぼが割れやすいように割つてきて、割つてつうのか刻んでつうのがな。それをけきよぐウヂのながさ入れて、ケキョグそういうのがら採つてこう。あどジガに焚ぐつのは、まあ昭和だがらそんなにや前くもつてしまつて煙立づだけは焚いでながつた時代だな。ジガに炉では焚いでない。煮炊きすづぎは、まあ、それでも炊げるんだけど、まあ、あだりながら、暖をとながら、炊ぐのもあるし、まだ、ベツカマドを作つて、ケッキョグ煮炊きように、やつたり。どっちがてば、煮炊き用が主でながつたがなあ。暖炉……当時は自分が覚えでらは、オガクズ使つたがら。ムガシ今の下北バスのあつこのどごに、……ムガシは製材所がいっぱいあつたがらさ。アツコツに製材所あつたがら、今だつたらオガクズは貴重でながなが手に入らないけどさ。まあ、ラグノウカの人が、そごさ行つて、寝藁がわりに、牛どさ敷がせだり、まあ、ちよとせば固形燃料のオガタンつて、圧縮して、それにまわつちやうがらさ。まあ、マギつていうとジャッパ、製材所がら木の耳な、製品にされない、そういうのジャッパつんだけどさ、そういうの買つてきて、焚いだり。」「どご掘つてもサルケだ。こごらは。今燃料にもしねし、そういう使つてるカマドてのものないし、今でいえばだるまストーブ、ブリキ製のストーブあるでしょ。そういうので焚いて、その前はどつちかていけばカマドだなあ。玉石を積んで泥でこうやったのをつなぎにして、乾燥させたもの……。なんぼがこう、平地のどご穴掘つてさ、カマドみたいにして、なんぼがこうたがく、平らなどごで作つたんでなく、土を掘つて、みんな土間であつたがら。うちのながはな。たでものながに、こつちに家畜がいで、何カラーつてそれこそ馬ばおごつて、何足あげでらんだうるせえどーつて、もちち、つながつてだがらさ。」

煙・臭気・灰 サルケの灰は捨てた。「燃えカスを……別に使わないな。ただそごらに捨てて、ハダゲに捨てて、ただゴジョつと混ぜてしまつたり、そんなに灰出ねえんだよな。ま、根屑でまあ、木でもそんなに灰が出ない木ど出る木ど、燃いがだにもあべたてさ。そんなに出不い。木だつたらな。木のかださによってそれこそ灰なんねで炭になつたりすけども。」（2015年9月22日取材）

⑩ むつ市大曲 Q氏 昭和10年生まれ 女性

居住の経緯 Q家の先祖は、藤田千吾とともに車力村から入植した5名のうちの一人である。Q氏は、大曲で生まれ、18歳でQ家に嫁いだ。

呼称 「サルケ」と呼んだ。それ以外の呼称はなかった。

年代・分布・質 Q氏が嫁いだ頃（昭和28年当時）も、現地ではまだサルケの採掘をおこなっていた。Q氏によれば「10年ほど前まで（つまり平成17年ころ）は採掘していた」というが（この証言については、聞き取りの際に再度確認した）、減反になってからやめたと話していることや、Q氏のご主人が平成よりも前だと話していることから、10年前というのはQ氏の記憶違いではないかと考えられる。「私ここに嫁に来たときでも、この辺の田んぼでも（使っていた）。」「いやあ、それはここへ嫁いできてからも見ました。10（年）……ぐらい前からははあ、全然、田んぼも。」「まあ、んだねえ。田んぼ減反になってからね、そういうのはやめました。最近、減反でやめなければ、まだそういうのもやってるがもしれません。」「（10年前くらいまでは）ありました。採ってこう、田んぼのクロのこう、アレに乾がしていました。』

採取の時期・場所 サルケは、田植えの前に、田から採掘した。「時期はねえ、苗っこアレすでしょ。その前にハア、採るんです。むがしはねえ、今はいろんなこう、津軽のほうだばきれいにこう機械でやるがアレですけども、うちのほうはナシロってね、ドロドロドロとしたごで、こいうあのナワシロってるんですよ。苗っこ撒ぐご。そごへ、ドロをやって、へてこうきれいにならして、靱をパラパラパラそれは苗こにして、あのそごさ大きくなれば、こう採って束ねて、田んぼに採りやすいように植えながらこうやったんですけど、今はオリダにやって機械でやるがらね。全然違うんですよ。」「（苗代づくりではなく）田植えの前です。きれいに田んぼそういうふうにかがりが良くなるように、それ植える前にほら。やるんですよ。』

採取の主体 サルケを掘るのは男性であった。また、重労働であるため、男性が行うべきものであると考えていた。女性で掘る人もあった。Q氏自身は手伝ったことがなく、作業を見守っていた。「私はねえ、テチダワナイけどねえ、お父さんとか、ほら、お兄ちゃんとかいる人はねえ、やりましたよ。見るのは見てました。」「それは男…の人がやるもんだと思って女の人はあまり…かける人もいけども、あまり、女の人は手かけないと思う。男の人のほうが、重いんですよ。こう、水だっぷり詰まってるから。なるべく男の人が。』

採取の目的 サルケの採取は、田を低くするためであった。採掘の際に出たサルケは燃料にした。「（田を）つくるウヂはね、ちょっと水かがりが悪いなあどもれば、まだ下のほう採ってサルケを採って、水がかかりやすいようにするためにね。そう。は、田んぼつぐらなくなつてがらはやらないんです。水かがりが悪いので、田んぼつぐってるうちはサルケを採って、上手に水かがりが良くなるようにしてつぐっていたんです。こう、田んぼと田んぼの間に川があるんですよ。それでも上がってこないときは、あの、ひぐい田であればすーっと水入るんだけど、ちょっと高めの田であれば、水かがりが悪いから、これは下のサルケ採った方がいいなつう気持ちで、取ってるみたい。」「サルケはさあ、田んぼ水かがりが悪いときとかそういうのもあるけども、チヂよせで、チヂの下はサルケなんです。それをジョウジに採れば、ほら、今だば油でしょ。火あるでしょ。そのサルケを乾がして、ウヂで燃やしたんです。それに当たって、こう。過ぎしたんです。私も80歳過ぎましたので。』

採取法 表土を寄せて、下にあるサルケを掘り出した。大きさは30×25cm、厚さ10cmほどであった。「チヂをこう寄で、下のほうはサルケなんです。ボホボホづの。チヂでなくて。それを、こうジョウジにこう、切って、きれいに、このぐらいの大きさ（30×25cm程度）に切るんですよ。こう田んぼであるでしょ。したら、一応、ホントはこのぐらいの大きさです。それをこのぐらいの何センチって分がなんないけども、このぐらいの、切り目にきれいに付けで」

乾燥・運搬・保管 採取したサルケは田のクロで乾かした。互い違いに5段ほどに積み上げ、間に風が通るようにした。サルケの両端を下段のサルケの両端に載せるかたちでレンガ積みにして乾燥させることもあったという。「ありました。採ってこう、田んぼのクロのこう、アレにかわがしていました。」「それ（切ったサルケ）を乾かして、カラカラどなるんですよ。ジダジダっていうサルケなんだけども、こう乾がしておけばカラカラどね、焚き火よりも燃えるんですよ。」「乾けばね、下も縮まって、大きさもちよっとは縮まるんですよ。そうですね。この大きさです。私は。してアチサ（厚さ）もね、（乾く前は）このぐらい（10cm程度）アツサもあるんだけど乾げばこれもちよっとチマルんです。で、ほら、直前は重いんですよ。下のほも汚れでるし、それをジョウジに乾がせば軽くて軽くてね。なも、子どもでもサツとたなげるように乾ぐんです。」「大きさはこのぐらいです。アツサはもうちよっと、このぐらいですね。で、重いけども、ジョウジに空間をこうあげで、ピチっどしないで、間を風がこう、通るようにして、積んで乾かせば、なもこう軽ぐたなげるよう



厚さを示す

になるんです。」「サルケをねえ、汚れて掘りたてだがねえ、こう空間付けてね、風が通るようにして積むんですよ。ずっと。こう一つやるでしょ。一つやったら、こうして空間を作って、このままにしておかないで、まだ汚れで乾がないとごあればまだ、これをこう、上手にこう、また反対にこうやったりしてね。これがまだ水がしみてれば、重いんですよ。こっちもこういうふうにして、とにかく風が通るようにして積むんです。」「5段ぐらいに積むみたいですよ。」

使用法・用途 サルケはロブヂで焚いた。薪と組み合わせて火持ちをよくした。炬燵にはサルケを用いず、炭を用いた。サルケは、夏場にはあまり焚かれなかった。「サルケも良がったよー。寒いときは。こういうおつきいロブヂだんだよ。むがしは。それでこんだ、こごアグでしょ。へばタキビ2～3本やればサルケここう、上げで、長持ちするように。木を長くして、ストフがいらぬから、長いこちがらここう、燃えでくるでしょ。その燃えでくるとごにサルケこちょこつとここうやれば、長持ちするんです。」「夏場はあまり焚がないと思います。」「コダチも、ほんだねえ、シミって、シミだね。炭をね、買ってきてこちょこつと、真ん中に置いて。ちょこつとね。へば布団ここう掛けでね。」「コタツするには炭を買ってきて、ちょこつと。あの、焚ぐんですよ。私たち小さいときは、ホントにどういふのもわがまますれば親に、食べるだけで幸せだってそう言われました。」

炊事にもサルケが使用された。炊飯はロブヂで鍋を用いておこなった。「それでね、今はストーフってるけどもツルベって、あるでしょ。それに下のほうにさ、サルケを焚いて、そごさご飯でもおつゆでも、今はそういうの使わぬい……あ、どっかではここう、あの、ジョウジに使ってるみたいだけど、商売やる人は、今こちらのほうは全然使っていないです。」「(サルケで)ご飯炊いたのも、おつゆ炊いたのも、あれしたのも全部見てます。」「ツルベにはここう鍋あるでしょ。それではご飯焚ぐこともできました。サルケでも焚けます。火力はねえ、蓋コ上げで見る見るして、強く焚げばここう、焦げでしまうでしょ。その焦げだ下のほがまだ美味しんだよ。戦争当時もあってさあ、私たちの時代はね。若いときはさ。学校にもろくにやれないような状態であつたらね。高校に入ればいいほう。中学校で卒業する人がいっぱいいたの。」

煙・臭気・灰 煙や煤がひどかった。臭気もあった。良いことではないが、それが普通だった。「煙はねえ、ボウボです。クサイ。私たち子どものときはクサイのも馴れでまってさ。」「うん、煙がさぎにモウモウど出るんです」「そごさツルベのアレでニオイもするし、煙も出るし、うちの中のきれいなところにやればシシけでまる。きれいなうちでも、はあ、汚くなってしまうってなあ、つう気持ちです。あの、ここうサルケの焚ぐ時は、カヤ屋根の時期でした。そういうもんだつもりでねえ、いいことではないけども、それもねえ。」

その他 戦後まもない頃は、米にジャガイモやキミ(玉蜀黍)を入れて食べた。海軍のセーラー服や灰色の毛布が配給になり、通学服やマントに仕立てて使用したという。(2015年9月22日, 2016年1月30日取材)

⑩ むつ市大曲 R氏 昭和5年生まれ 女性

居住の経緯 先祖は津軽地方の鶴田から入植したと聞いている。開拓の苦勞を耳にしているの、この土地を大切にしたいと思い、手入れに精を出してしているのだという。「津軽のほうであつたの。だらの、オラほのチヂオヤのさ、親の(注:個人的内容につき中略)こちや来てすぐ苦勞したんだべの。そいでもまんだ良ぐわいたしゃべるとごオラほのチヂオヤのおめやてでもだいがらどぐでもなでもなぐさいねての。いしよけめやってるの。チヂオヤの地面なぐしたぐねって草とつたりの。」「ハダゲ好きでねの。草おがっておがってやってそやって。田んぼだば一杯やってあつたの。でも今田んぼのほいっきやあのほれえ、おがね貰ってるしてえ。それでおれなあど親だいの世話になんねふてもやって。」

呼称 サルケと称した。

年代・普及 R氏が幼少のころから使われており、20歳にならないころまで(昭和25年ころまで)使われていたのではないかと。また、大曲ではほとんどの家で使っていたのではないかとR氏は考えている。「サルケ?のあう、もどあのオラほでそうせば、オラもちせどぎ、やったもんだって。ほれえ、なに燃しての。」「20ならねうちでねべが。のう。すんごぐしてものじょんずにつくてさ。こあやてそして田んぼしぐおごしてやたりしての。田んぼもなもいばいあるんだよたてよぐこたにやたもんだてふとりでワしゃべながら(笑)。」「この辺だっきや全部使ってたんでねがの。」

採取の時期・場所 土地を買い、サルケを採取した場所を、田畑にしたのだという。「いやいや田んぼにおつかの田んぼでねただなんてすべえ、そいふ地面が買ってえ、それ掘ってほれこんだ田んぼついたりハダゲついたりしてよぐやたもんだどもてワ感心してる。」

採取の主体 R氏の父親が採取したが、R氏が手伝われることはなかった。「いやそういうのは全然やねのオラほでやらせねんだもの。たてそういうほれえ、まあなんてサルケ採るみたいだ地面買って、やってよぐこちよとどしゃべながらおらほのチヂオヤよぐこしてやたもんだなどそう思ってる。」

採取の目的 R氏の話から、田畑にする前段階としてサルケの採取があったと思われる。

採取法 四角形に掘り採った。大きさは不明である。「なんてばい、こうシカグに採ってさ、フサフサどなつての。すぐぐきれいになつての。」

使用法・用途 R氏の家では、炉でサルケを燃やすことはなかったが、小屋で暖房の燃料として利用したという。どのような道具を使用して燃やしたのかについては、R氏の話をよく理解することができなかった。炊飯は薪を燃料に薪ストーブでおこなったという。サルケは結構よいものであったとR氏は語る。「(サルケを燃やしたことは) あつたよ。でもエのながでだばやんねたてほれ、小屋だのこいのあるどごさやって、結構まだいんだいの。いやあ、なんてばい、こうシカグに採ってさ、フサフサどなつての。すぐぐきれいになつての。この辺だつきゃ全部使つてったんでねがの。」「(サルケは) なもしね、ただ燃やして。(サルケは) なんさもつがね。ただこして、家のながでやってる人もあるしの。今だつきゃ誰もそいうふとやるふとね。」「ケツキヨグほれなにただトモダヂくれば遊んだりしてのう。そてやてあたの。たんだほれ、寒いもんだもの。何て言うべ、今なもそいうのねべさ。炉つぐての。オラホのチヂオヤなんでもやるふとであったの。だてストブでものなんでもさ、よそのふとよりも早く自分でつくりしての、やてあたの。何でもやるの。」「ウチではの、まだごごにこつちのほに小屋建つてあつたの。そいどぎなんがしたりして、そいで燃してま、そいうきもちでオラも(笑)。」

煙・臭気・灰 煙は、煙突がない状態で放出されたので、臭気もひどかったという。「煙出るよー。出るたてま、ストブさやたどごさ煙突ぐらいぐべたての。それなもやねだもの(笑)。「いつもどごでそいうのやつてもニオイで分がるつて。」(2015年9月22日, 2016年1月30日取材)

⑧ むつ市大曲 S氏 大正15年生まれ 男性 / 同所 T氏 昭和5年生まれ 女性 (両名は夫妻)

居住の経緯 夫の母方は車力、父方は飯詰の出という。夫妻ともに大曲で生まれ育つた。夫の母方の祖先は藤田千吾とともに入植したという。「津軽のほだばツヂいどごで、たてごごはなも、こからず一とみなハア、サルケだもの。」「全然土地あ違うもの」と言うように、津軽地方は大曲に比べてはるかに土地がよいと考えている。「オいのちぢおやの、まづは、マゴジサマ(祖父)代だね。飯詰がら来ての。なんだが知らねたて、むがしの津軽オヤシロだがつうだにあたべさ。なも、あの近辺だつて言つてあつた。」「いやあ、この辺のふとだば、貧乏だふとだば、冬ゆぎ切つてもなもそさいつて起ごしたもんだだ。カイトグたて、最低のカイトグ地帯だごごだば。ワ歳いつてがら、兵隊さ行つて来てがら津軽さ行つてみだけども、そのオの母親こんだあつのほのシャリギ(車力)だんだ。行つてみだばつてごご全然土地あ違うもの。よぐこういどごさ来てやたもんだでば。ごごさ来たのはだがら、シャリギの、セイガン(千貫)づどから、今でもハガあるきやなら、あのふとさかだつて来たらしいカイトグするに。藤田。藤田千吾」(S氏)。

呼称 「サルケ」と称した。

年代・分布・質 サルケは大曲一帯に分布しているが、段丘に近い東側からよく採れたと夫妻は認識している。「津軽のほだばツヂいどごで、たてごごはなも、こからず一とみなはあ、サルケだもの」(S氏)。「ここでもさ、採れるどごど採れねどごあるの。何つえばいいの、そのしゃべがだわがねけどもさ、この辺の道路(現在建設中の下北自動車道周辺の道路)の方あるべ。あそごらへんがすぐぐ採れであつたのな」(T氏)。

T氏によれば、サルケは昭和16～17年あたりまで焚いたという。「今はあサルケ誰も掘ねえもんなあ。むがしはみな掘たもんだけども。掘て燃料にしての。何年も。たげな。生でなほ、ゴログ年生あたりまでも燃やしたんでねがの。」「ワ、小学校ゴログ年生まで焚いだべなあ。サルケ。ごごでもなあ」(T氏)

また、S氏によれば、津軽地方の人びとが移住した地域として代表的な近川、大曲、土手内の三地域のうちでサルケの利用がもっとも盛んであつたのは大曲だつたという。「ドデウヂ(むつ市土手内)もごごど似だようもんだんだ。ドデウヂにオエのオドトもいでたばて。もう死んだ。亡くなつたんで。ドデウヂもごごど同じようなやりがだだつたごつた。やっぱりツガルシュウいるす。ごごでツガルシュウいるのオオマガリ(大曲)、ドデウヂ(土手内)、チカガワ(近川)。「チカガワはごごよりまだいんだ。たげがら。とつ(土地)がたがぐなつてがら。サルケはチカガワねえな。チカガワだあ、ごごどドデウヂだ。ごごの区間いぢばんだよ。オオマガリ、ずっとずっと。」「まあ、サルケはこの辺いづばんだべ。」(S氏)

採取の時期・場所 「アギでねべがなあ。アギだどもるなあ。春は田圃で忙しいがら。」とT氏は語る。サルケを採取する時期は秋だつたのではないかと記憶しているが、あいまいである。また、採取は毎年おこなわれたという。

採取の主体 サルケを採取するのは男性が中心であつたという。モッタ(道具)が大きいことも理由のひとつであつたとT氏は考えている。「掘るのはおどごのふとばし、掘つてあつた。モタてばおつきいアレあるんだ。おつきいどごでさ。モッタあるよ」(T氏)

子どもも手伝つた。6～7歳頃になると、モッコでサルケを運搬し、15歳頃からは、採掘の手伝いをしたという。

これらのことは、昔の子どもがよく手伝いをさせられたことや、真面目で頑固な性格の父親の思い出とともに語られた。「(子どもの頃に採取の手伝いを)した。自分でも起ごしたものを。ただ起ごしたのを、まあ、今の子どもにはしじられねえがもしれねえけど、たって、あのこうもでぐなったものを、モッコってたなぐのあるじゃな。担架みたいに。あいさナンメエがへでたないてあって(歩いて)てづだいたり、うん。だいたい、6歳がら7歳でばそしてしごどさせらいだもんだもの。今のふとだばまだホントに子どもなもせね、遊んでらばって、ワレワレの時代だばはあ、まあ5歳からはあ、こたはたげの草むしりさせらいだもんだもの。まあ、今考えてみれば、あのどちはろ、こごの陸



タヂの入れ方

奥湾、サガナなんのサガナでも余ってでいであつたの。ワ、つせはあ、7つのころは。山はもう山菜なぐなって、まあそれでやっぱり生活したんでねがなど思ってる。田だば自分の米自分で食うってばもう、終戦後だもの。全部配給であつたもの。」「いやあ、大変だって、喋っても誰もホントにしねえ。大体、自転車もねえ、車もねえ、それこそ吉幾三みたい、うん。」「15歳ごろから、オヤヅの手伝いした。(父親のやりかたを見よう見まねで覚えた)。オイのオヤジは頑固オヤジ有名であつたもん。その代わり悪いごどふとしもしねえ、もう、厳しいオヤジだったもん。うん。だがら、まあ、苦しぐなればチヂオヤ思い出す。まあ、わりごとそすれば……母親も、2年も11、12学校行がねでやったつきやそのづぎ、人騙したり嘘なんかは死んでもすなつて言いで。」

採取の目的 S夫妻の口からは、燃料の不足を解消するためであるという目的が語られた。「マギもほらこのあだりあまりねどごでさ。このサルケの」(T氏)。「その奥さサルケ焚いで生活したもんだもの。木なもねもんだもの。な

も木たて山さ行ってそれこそこの辺の人だば柴だって、枯れ木、それよりもこのサルケ起ごしたの乾燥さへでつで(積んで)、冬そしてそれで過ごしたもんだ」(S氏)。

田地の改良という目的についても語られた。「何てばいい、そのサルケが厚くてさ。水まわりも良ぐねし、そのためにサルケ何センチだら何センチってずっと起ごしてほら。水回りもよぐしたべし、燃料にもした。」「水もすぐながつたがら、このサルケとってサゲネば、水、たぼ(田んぼ)作らいねしたったのさ。それでほら、切るのも切たし、それがまだ燃料にもなて。燃やしたりの。したもんだ。起ごしたらまだツヂ採ったほさ寄へでつて、まだタヂいれで、まだこしてこうやったもんだ。なぼが水、切たどぎあまだ水ジョブジョブしてるがら、もじもなもでぎねのよ。たげ水きれでくれば、こだまだあらだめでベツのとごさ持つてつてほら。乾がすのさ」(T氏)。

採取の方法 サルケを採掘するには、まず表土を20~30cmほど除去したうえでおこなつた。「サルケとた上の、このくらい(20~30cm)のツヂ、それを活がして、田つくて」(S氏)。「ごござーっとさぎに、タヂでずーっと長く、田がらますぐに付けでおいで、てまだこのほら、タヂでやあねえくれにかがこうやってさ、これがツヂ今度こちや、こちにまだ起おごすほういっぺあるがら、こちやツヂこう寄へでさ、寄へでこのほら、こうやってで起ごしたもんだ。採ったあどに、まだこんだこごののこんだほら、採たあどさ入れるわけ」(T氏)。

表土を除去したのち、縄を張り、タヂで切れ目を入れ、サルケを掘るための大きなクワ掘り起こした。採取したものは水切りをしてから積み重ねて乾燥させた。「仮にこれ、野原だば、田起ごすに縄張るじゃな。ずーっと。これ田のながだば、だいたいこれ縄張って、こう、(タヂで)目入れで。それでこのおき鉤もてこんだ起ごして」(S氏)。

「モッタだ何がだがつてへっちやつたんで。ホントの名前は何てばへえな。切れ目いれるのは、タヂだがなんだがつて。田のフヂさあの、ヨシでもカヤでも草でも田植えするどぎに、草の根生えるがら、しかぐにタヂでこう、回すのな。そいで傷付けでさ。しかぐに長くやって、モッタが入るようにして、田んぼこうあれば、ツヂ、こつちやこう上げでさ、まっすぐにタヂで傷付けで。こうやっての。ちょうどモッタで起ごすにいいような傷こ付で。やったもんだ。」

「してこう、しかぐに取ってさ。ツヂこうはだげでまって、その下にほら、草の根つてへばいんだが、なんてば、サルケがあるわけ。ツヂこう、寄へでの。してこう、じつとこう、きじ(傷)たででこう、しかぐにちゃんここうしてさ。こうしかぐい、クワみたいのでこう、起ごしてほら。そしてあの、たいてい水切つてがら、こう、なんぼが積んでの。あの乾燥さへだもんだ」(T氏)。

サルケを採掘する道具は、モッタよりも大きな専用のクワ(オゴシクワ)であつた。アラギに使用するのは主にタヂとモッタで、これらは現在も保管しているが、オゴシクワは現存しない。「オゴシクワなんだがなんだつて言つてあな。 (略) おきふて、こういう形になつてるんだけど、こごさ柄ついで。」「この辺の田は下ずっとみなサルケだおん。掘ったよ。これ(モッタ)よりもまだこう、大きいクワでなあ。もと大きいの使つた。タヂでもてずーっとへつてキズついで、このツヂ起ごして、そして田起ごして。してつぐつたの。津軽のほだばツヂいどごで、たてこごはなも、こからずーっとみなはあ、サルケだもの」(S氏)。

採取のサイズは、約1尺四方、厚さ10cm程度であった。「まあ、普通そうはがってやんねけど、このぐれあるな。このぐれあるごった。1尺（シヤグ）かける1尺ぐれだべな。うん、そのぐれあった。あづさはこのぐれ（10cm）でな。シヤグにして」（T氏）

土地改良のために、冬場に山から運搬した土を、客土した。「なあに、それ乾燥させねば駄目で、山のあれがらツヂ冬ふばて、キャグド（客土）だなんてあらあ、国に命令されでるとふとつだいな。で、冬ソリでツヂふばて、撒いでそして田つくて。」「この辺に山あったべ。その山がらみなツヂ持って来て、客土したんだもの。終戦後はもう、そういうどご国でみな払い下げでしまったどごで、だがら今そういうどごほとんどなくなつたあべ。この辺もあつこつみなこう、山であったもんだ。それがらみなツヂとって」（S氏）。

乾燥・運搬・保管

田のクロの上に並べて一次乾燥したのち、更に高い場所に運び、約120～130cm程度の高さに互い違いに円形に積み上げて二次乾燥させた。雪が降ると、サルケのニオからソリで家まで運搬した。「むがしは殆どごこのフトもさ、サルケの採れる場所がらみな起ごして乾燥さへで使つたもんだ。生まれだ頃からハア、ずっとそれは見で育つて来たんだ。おどごの人がさ、起ごしたのほら、大体水切れでくれば、クロの上ほら、並べで、乾がして、そしてまだずっとこのたがいとごさ上げてきて、更に乾がして積んでおぐの乾いだら。そしてえのあれさはごんで、燃やしたもんだ」（T氏）。「ちょうど長さはこのくらいで幅もこのくらいだ。こいうふに切つて、これでもって起ごしたものをほら、全部乾燥さへでまつて、乾燥さへだものをこんだ円ぐ重ねで。風通良ぐして、これぐれ（120～130cm）たがぐ積んで、互い違いにずっとこう円ぐ積んで。それ冬なれば、こんだ、ウチさはごんで来て、冬ほら、燃料にするに積んであったの。」「ソリで。今だあども使うふとねたて、むがしは山からこたの採て来てソリづみな作つてな。それさ積んでエさもてきて、小屋ながさ詰めどいで冬。」「だつてみなしたがら田んぼの岸さサルケづのニオ積んで。ニオつて、こう積んでそさ置いて。ユギ降ればはあ、こんだ、そさソリ持つてつてふばつて来て」（以上S氏）

使用法と用途 サルケはロブヂ（炉）で燃やし、暖房のほか炊飯にも使用した。炊飯はナベでおこなつたという。昭和16～17年頃以降は、粉炭を燃やすようになった。「焚き火。燃料。むがしはそれ、ほとんどそれがつつたの。何てばいい、そのサルケが厚くてさ。水まわりも良ぐねし、そのためにサルケ何センチだら何センチつてずっと起ごしてほら。水回りも良ぐしたべし、燃料にもした。それさ、冬うちそればり燃やしたな。煙たくてなあ（笑）。」「炉で。ロブヂつてした。ご飯もみなそれでやつたの。」「それがらこんだほら、セギユストーブとがな。石炭ストーブとが。そいうのがこんだあ、さがんになってきたどごで、やめだけど、その前はほとんどつつかた。」「（T氏が小学校5～6年生以降の時代、サルケを使わなくなつてからは）最初は石炭。石炭の粉炭だがなんだがつて、細かいやづさ。粉みたいだの。それあの燃やしたもんだ。それがらほら、徐々にセギユがの。燃やすよになつたどごで。だも今マジ焚がなくなつたけども。前はマジ焚いだりの」（T氏）。

また、サルケの火や熾で、ため池から捕つたフナやドジョウなどを焼いて食べたという。「いいことつて、ねえな。フナだり、そしたのたつて、串ささして焼（や）で食うだけだものしてみな。フナたつてこの辺そごに二枚橋おつきいタメイゲあるんだ。田起ごしてがら作つた。そいさどういふわけだが、フナとが、ドジョウとが、こいの（こいうの）いっばいいでつたの。そいのみな捕つて焼いで食つたりしてろ。いだつたわけ。フナもコイもいだし。うん。」「いやそれほら、田んぼ起ごせばこだ、排水堰のどごに、セギ掘るべ。それさこだ、その田さ水へるにタメイゲがら水ふばて来る、それがらみな水入るべさ。そのタメイゲがら（フナが）来たどもつて。みな入つて来て。大体、ワア、18～9ぐれのあたりだば、どのセギ掘つたつて、このドロ上げればハア、フナみなボボど出で来て（笑）。捕つて焼いで食つて、なも、フナ焼いで干したのこんだ、ミソカイヤギにして食つて。」「えさ持て来てたら、シ（火）焚いで、それみな燃えればこんだ、何ていうだ、真っ赤になつてまつてあら、そのふ（火）さ、串さ通して刺しておげばふとりで焼げるもの。』（以上S氏）。

灰を畑の肥料とした。「灰はしたがら、このハダゲ作つたりなんかすると、なも、ハダゲさ撒いで、なも捨てる人ダもねもの。なも捨てね」（S氏）。

火の操作 大きな薪は手に入りにくいいため、山から採つてきた柴の上にサルケを置いて（立てて）着火した。火は長持ちした。就寝前に灰を被せておくと、火を温存することができ、翌朝の着火が容易であつたという。「サルケはとてもよいものであつた」とT氏は語つた。「それ（サルケ）さ木の枯れ木混ぜで、火つけで。それさそのサルケづのこのちょんどの位あづがさ。シヤグでこのぐれの、それ割つてこう立でどげば、そさ火ついでグーつて」（S氏）。「なもまいにおそれほら、なんぼがのマジさ、マジで火つけでそのなんぼがのマジさほら、サルケをこう、やつてさ。燃やしてほら。うん。そごぐまだあつもんだ。」「マジもほらこのあたりあまりねどごでさ。このサルケの。こんだこの山さ柴、柴てば枯れ枝とてさ。落どして採てきて、その上さこの、サルケ、被せで、そして燃やして。長持ちすもんだよ。サルケな。こんだ夜寝るづぎ、灰かぶへでさ。ながさへばこんだホコホコでの。アサマほら。火燃すにたいしたラグであつたよ。すごぐいいもんであつた。今考えでみれば」（T氏）。

煙・臭気・灰 火が燃えさかるまでは、煙がひどかった。家の中には煤が付いた。しかし、その煙こそが暖かいのだとT氏は言う。また、S氏は、集落には独特の臭気が漂っていたらと考えている。「燃えてまればいいけど、すぐぐけむて、エのながも煤になってな。あったかいんだよ。すぐぐあったかいもんだ」(T氏)。「エのながもほんとの、今考えでみれば、あの煙だもんだもの。ブスブスど。」「いんやあ、なも、ハア、ここ(の集落)さ入ってくれば、わがったべおん。サルケのニオイで」(S氏)。

その他 サルケを使っていた頃の暮らしは、現在の生活からは想像もつかないものであったという。津軽から入植した母方の祖先の生活の場を自分の目で確かめるために、津軽地方を訪れたS氏は、田園の広がる景色に目を奪われたと話す。「いやいや、とてもじゃねえが、想像されねえな。ほんとに。よぐやっただもってる。ワあその頃、あらあ、だなあ。終戦後、まあ、20年、30年。30年ぐらいなつてながら、なんぼがこう、いぐなつてきたね。供出米とがそういうの取らいねぐなつたべ。戦争なぐなつたがら。だがら自分でつくたものは自分で食えるようになったし。その前は、一反歩なんぼつて最低、ハアそれ以上とればジブで食べるんたつて、それ以下のものはみなハア、軍国主義だもの。みな取らいでしまつて。終戦後、つくたどごあ、国の地主どあみな、取らい、取らいでてがニソグサンモンで払い下げらでしまつて、それからいぐなつてきた。なんぼがほんとに。いやこいふになるたんて夢にも思わながつたオラは。大体、昭和20年の年、兵隊さ行つたけども、その当時、何ていうが、たて、車もなんでえもねんだもの。そういう時代だもの。それがらみれば津軽あだりあ田んぼたて津軽平野たてほんとにものすごいもんだものな。いやほんとによ。ワ、わざに見にいて来たど。兵隊いてきてがら。母親どいるどごどういう生活してらつたべど思つて。ああ、この辺ど全然ちがるもの。やっぱりここは下北半島だけしかながつたよ。ほんとに」(S氏)(2015年9月22日取材)

①9むつ市田名部土手内 U氏 昭和10年生 女性 (pp.146-147表1では、大曲での話を①9A、土手内での話を①9Bとした)

居住の経緯 U氏は、土手内で生まれ育ち、同集落内のU家に嫁いだ。U氏の実父は△家の別家で、祖先は津軽地方のアオノオ(不明。U氏によれば、板柳の隣、小友の手前だという。青女子のことか)から土手内へ移住したという。義父(U氏の主人の父)は津軽地方の百沢(弘前市)から入植した。実母は大曲の生まれであったため、U氏は幼い頃には土手内だけでなく大曲でのサルケの利用についても見聞きした。ちなみに、②のθ氏は、U氏の母親の弟に当たる。

かつては増水した田名部川の水が道路や家の近くまで浸水して苦労したという。この集落の住民は、タビから来た人であり、そのため、持ち山がなく、燃料としてサルケを発見し、燃やすようになったと考えている。目名(東通村)へと2時間の道のりを通り、田畑の仕事で収入を得る人も多かったと語る。「(祖先は)津軽の。△家の本家、これはアオノオ(弘前市青女子か)づどごがら出で来て。アオノオ。あどの人だちはオドモ(弘前市小友)ていうどごがら。そちがら出で来てるんだ。ほとんどごらの人はの、今になればの、タビがら来た人が多いけど、もどはここは30軒がナンボしかながつたの。(昭和)40年がらたきやがなあ、増えで増えで増えで、今だきやナンボたきやな、150くらいあるみたいだ。40年のあたりだばの、ほんとにながたのさ。ナンボたきやの、150くらいあるみたいだ。ウヂのおじいちゃん(義父)も、それこそオヤジも、津軽がら出で来ての。ヒヤグザワ(弘前市百沢)がら出できて。ここまで流れできて。そしてワダシほらあつちさ津軽さ行ぐつたただけど、いやどうしてもむごさ行つてでも、リンゴづもの全然ちよしたごどないがら、行つてもシゴドはできない。してハアここにいるちゅうごどで。」「すぐぐまあ、ここはブラグがタビがら来た人だして、ほとんどまず山とかそういうのないべし、手で掘つたりしてればどうしても草の根があるもんだごどそれを高く積んでおいだりしたら乾いたら、燃やしてみたら燃えるどごで、それでやつたみたいだ。うちの人をよく喋つた。へぎ掘つたらへぎのソゴがら出でできたのがサルケで、燃やしたつきやすすぐ燃えるどごでみんなして燃やしたつて。大曲だのも結構やつたんだ。」「(サルケについては)タビがら嫁に来たりしているんだば、分がらないど思う。ワダシはここの人だして、生まれでここにいるんだして、ここはブラグのこともの。分がるけどさあ。うん。ホントにここはブラグはの、ホントのヤマオグだ…あの道路もなものの、あのグジャグジャして。真夏でもナガ靴はがなればあるがれないの。雨ふれば水増しするしさ。そうだったんだよここ。ほいでも、今はほら道路も良くなつてさ。よぐムガシだばの。ここはウヂの下まで水まし。雨が降れば水増しが来るわけ。それが何故かてば川が曲がつてクニャクニャしていだもんだごどでけつきよぐ川のナガき木だの何だのいっばい入つたりして、今はほら、新しい川がでぎだりしてどごで今は全然上がつたごどないけど、ドデもながつたもんだごどで、今はドデもあるし、今は水増しづこともないしさ。前は雨降ればあ、水増しだつて。ここは丁度の道路ギリギリまで水が。へばここは向がいの、亡ぐなつたけどお母さん『やあ、まんだ水あ来たあ』つて。『水あ来たたらこつちや来たたら』てたら『うん、今もつとあがれば行ぐして』つて。よぐ水入つてやっぱり、ホントの土手内だや。」「学校づの全然行がねくてね。むがしみたいな生活今せば、今だば百万長者になるなつて笑つてら(笑)。昔はみんなね、カマで草刈つたりさ、だいいぢ、目名(東通村目名)づどごまでここがらね、朝、歩いて行つて、一日働いて